

01 敷地／計画

敷地は、亜熱帯気候の沖縄県今帰仁村。都市から離れた農村部に位置する。住民は農業を営む夫婦とその子ども2人であり、亜熱帯地域の自然と接続した暮らしを営んでいる。風や雨を建築内に取り入れ、亜熱帯気候の自然を十分に享受できる計画とした。この家により彼らの暮らしがより自然と接続されることを期待している。

02 腐敗を受け入れた新しい暮らし方

近代以降、建築や都市は腐敗を徹底的に遠ざけてきた。しかしその結果、自然との濃密な繋がりも同時に遠ざかることになってしまったのではないだろうか。今回の設計では腐敗というものを住居に取り入れることにより自然循環との接続を試みた。腐敗を受け入れることで自然の大きな循環の中に建築を位置付けることが可能になるのではないかと。その仮定の下に設計に取り組んだ。

03 腐敗から構法を考える

腐敗をとり入れることで住居は常に新陳代謝し続ける。RC造などの建物とは違い短期スパンでのメンテナンスが要求される。セルフビルドにより容易にプランを変更できる構法を取り入れることでメンテナンスを行うと同時に現状の生活スタイルに合わせて住居のプランを変更していくことができる。生活者は常に快適な暮らしを求め住居プランを変え続け、それにより生まれた端材はスケールを変え土中環境を改善するツールとなる。

04 主な構成部材

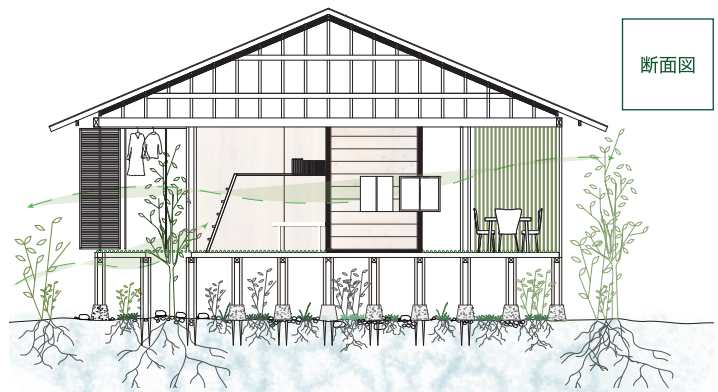
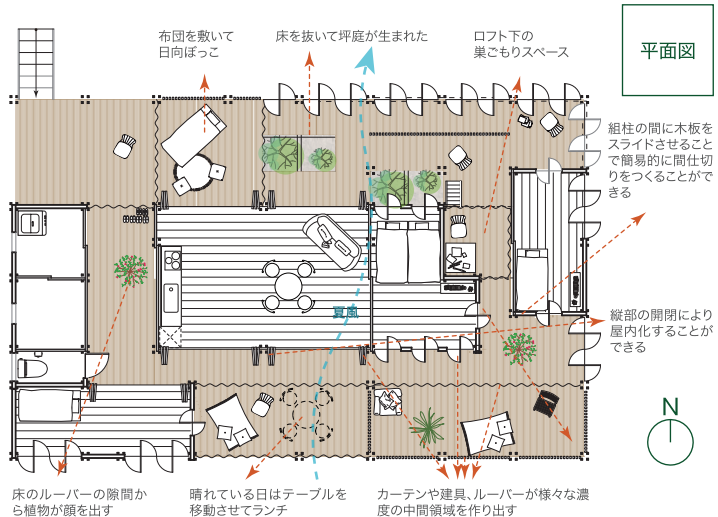
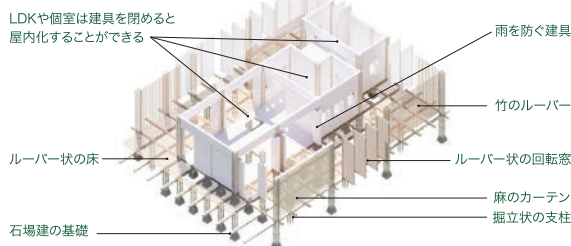


05 部材の転用

この住宅を構成している部材は腐敗後土中改善のツールとしてリサイクルされる。例えば柱などの木材は粉碎しウッドチップに加工してマルチングなどに利用される。床や衝立に用いている竹は杭上に加工し土壌に突き刺すことで空気と水を浸透させることができる。ほかに麻状のカーテンや藁を使用した断熱材などは堆肥として用いることで土中環境を改善していくことができる。住宅の構成要素が徐々にスケールダウンし最後は土に還っていく。

06 腐敗を促進させる方法

中間領域にルーバーやカーテンなどの多孔質な建具を用いることで雨や風を取り入れ、インフィル部の不朽を促す。またルーバー状の床を用いることで下方からも空気が流れ、地面とより繋がることことができる。LDKや個室は板状の建具の開閉により雨を遮ることができる。



設計コンセプト

近年以降、建築や都市は腐敗を徹底的に遠ざけてきた。しかしその結果自然との濃密なつながりも同時に遠ざかることになってしまったのではないだろうか。今回の設計では腐敗を住居に取り入れることにより自然循環との接続を試みた。腐敗を受け入れることで自然の大きな循環の中に建築を位置付けることが可能になるのではないかと。その仮定の下に設計に取り組んだ。

躯体には木や竹、カーテンには麻、断熱材には藁など時間と共に徐々に腐敗していく建材だけをを用いて住居を設計する。RC建造物とは違い短期スパンでのメンテナンスが要求される。セルフビルドにより容易にプランを変更することのできる構法を取り入れることでメンテナンスを行うと同時に現状の生活スタイルに合わせて住居のプランの変更

ができるように工夫した。

容易に増減築が可能なインフィル部分と建築に掛かる荷重を担保するスケルトン部を分けて計画した。スケルトン部分は土壌への影響を考慮して石場建としインフィル部分は掘立柱とすることで基礎を用いなくて容易にセルフ増減築を行えるようになっている。

増減築によって生まれた木の端材は粉碎しウッドチップに加工後、マルチングに用いる。また麻のカーテンや藁などは堆肥として使用する。住宅の構成要素が徐々にスケールダウンし土へと還っていく。腐敗を取り入れた住居は常に新陳代謝をし続け、大きな自然循環の一部となることができよう。

審査委員講評

長い期間でセルフビルドの増減築や修繕を想定した家は図らずとも注目度は高くなり、地域との関わりは無視できません。沖縄県今帰仁村は19の集落からなり、住民同士の結びつきが強いと推察しました。内外の中間部分が腐朽することで家が自然に還ることを促しつつ、誰もが家づくりに参加しやすい設計の工夫によって、自然環境保護への意識を高め合う近所付き合いが生まれるかもしれません。